

報



會

會 岳 山 本 日

56

月 四 年 一 十 和 昭

スキーツアー
主催者に望む

去る四月四日八方尾根黒菱小屋附近で、東鐵主催スキーツアー隊員中に凍死者を出した事件は、東鐵のかかる催し始まつて以來の大椿事であり、各方面から重大問題視されるに至つたが、此の機会にスキーツアーそのもののやり方に就て一應の反省をする事が必要であらうと考へる。

東鐵が数年前からスキー地宣傳のためスキー講習會を開き或はスキー列車を出して大いにウィンタースポーツ普及のため努力を拂つて來たことは、鐵道省の目的が何處にあつたかと云ふ問題とは全然別、結果から見ては決して悪いことではなかつた。しかし初歩の所謂ゲレンデに於けるスキー講習會と更に一步を進めたスキーツアーとは根本的にその性質が異なる。苟くもスキーツアーとなると結局スキー登山の領分に入り、従つて一つの山登りとなる、ゲレンデでの講習會などは、その組織に於ても方法に於ても同一視すべきものではなくするのである。

スキー講習會の募集に應じて参加する人達は大體暇の多い又相棒を求むることの比較的困難な純粹の所謂大衆スキーヤーで、學校の山岳部やスキー部のやうな訓練を受けて來た人達とは大いに趣を異にしてゐる。

又年齢も十五六歳位から五十歳位迄に亘つて居つて、その生活狀態、教養などに於ても全く烏合の衆である。従つてコーチヤーが同じ説明をしても、之を理解し得るものもあれば理解し得ないものもあり、脚の速さもまち／＼で、かゝるパーティを引率するリーダーの苦心こそ誠に目も當てられぬ次第である。

足並みの不揃ひ、體力の不均衡、技術の不公平、教養の懸隔、人數の多いことなど、山登りには凡そ忌むべき之等數多の條件の下にツアーを催して今日迄遭難事件を惹起しなかつた事は全く幸運であつたと云はなければならぬ。

今回の八方尾根の遭難も遭難者が大吹雪中に無暴にも出かけたといふ登山者としては非常識な行動に起因するものではあるが、これとても此のパーティがその約三分の一の人數であるとか或は相互に知り合ひの間柄であつたならば誰かが注意し得たに相違ない。

そこで將來此の種の催しの主催者に對し望まざるを得ないことは、かかる種類のスキーツアーは今後全廢し、ゲレンデだけの講習會に専念するか、若しくは年齢、職業、人員其他の制限を嚴密に附し、此の缺陷からの破綻を避けると云ふ注意である。勿論後者の場合にはリーダーの養成にも組織的に努力を拂はなければならぬ。從來のスキーツアーの指導者の顔振れを見ると一つはスキー關係のプロフェッショナル乃至之に近い種類の人達であり、他の一つは主として學生或は學生上りの純然たるアマチュアである。スキー技術の指導にはどちらにも優秀な人が居るのであるが、スキーツアーとなると前者にはリーダーとして適當な人が少い、これは登山となると單なるスキー技術の優秀な事ばかりでは駄目で所謂リーダーシップを要求されるからである。併しアマチュアのリーダーは境遇の問題だけから見ても常に必要に應じて動員することが出来るものでもないし、鐵道省のやうに年何回か定つてスキーツアーを催す所では當然一定數の専門家を養成してゐていいのではないかと考へられる。アマチュアは無責任だと云ふ譯ではないが、報酬を受けることは、それだけ責任が大きくなる道理で、それが、一つの仕事であれば成績の如何はその個人の生活にも直接關係し、勢ひ眞剣に打込まざるを得ないことになる。結局スキーツアーのコーチヤーとして山に入り得る専門家を養成することは、主催者側にとつても、講習會に参加する者の側にとつても望ましいことでなければならぬ。

更に又一層根本的問題としては、一般に「山」の教養を高めることも考へなければならぬ。鐵道省の如く有力な宣傳機關を持つ組織は當然積極的にかゝる方面に對して努力するべきであらう。(中屋)

エヴェレストの問題

一九三五年の偵察

エヴェレスト委員會がチベット政府から一九三五年六月以後向ふ一ケ年間の入國許可を與へられたのは既に同年の春であつて、もはやその年にモンズン前の攻撃を始めるのは時期遅れだつた。それにモンズン後の攻撃の是非如何がなほ問題である今日、その攻撃は輕卒に行なはるべきではない。この機會を利用して委員會はシブトンで隊長とする偵察隊を組織したのである。

委員會が偵察隊に要求した調査は主として次の點にあつた。

- 一、モンズン中の高所における雪の狀態に關する材料をあつめ、モンズン期間中又は、それ以後の登攀の可能性を調査すること。
- 二、西側からのルートに再檢討、三、ノースコルの氷の狀態の調査
- 四、一九三六年の本隊に加はるべき隊員の豫備銜及彼等の馴化
- 五、新裝備の試験
- 六、エヴェレストの北方區域の寫眞測量及一九二一年の偵察隊の殘した仕事の繼續

一九三五年五月初旬ダーゼリングを出發した一行は途中三隊に分れて種々測量、偵察をつづけ乍ら七月四日にロングブク寺院に到着した。同六日、一行は東ロンブク水河に向つて出發し途中スパンダーの測量隊と

分れてノースコルに追んだ。第三キヤムプの附近でモリス・ウィルソン——一九三四年單獨でエグエレストに向ひ行方不明になつた男の死體が發見された。

同月十二日、一行はノースコルに天幕を設置することが出来た。この高い砂部をきびしく吹きまくる寒風は同十六日一行を第三キヤムプまで追ひもどしてしまつたのである。この下りで経験された雪質と雪崩の痕跡はモンスーン期間中の雪質判断の困難さと、再びノースコルに登ることの危険とを一行に感知せしめるに充分であつた。斯様に高所の食糧や裝備を抛棄して下山した一行は後二隊に分れて東方區域の調査を行つたのであつた。

八月の始め、一行がロンブク寺院に集まつてからの仕事はエグエレストの東部及び北西稜の調査であつた。それより一ヶ月間にわたつて前代未開の大規模な偵察が行はれた。一行は九月六日にカルタに到着し、更に北シツキムの山々にあそぶべくチョーテン・ニイマ・ラを越えたのである。

以上がシプトン偵察隊の行動のあらすぢであるが、その直接の結論といふのは大體次の五點に集中される。

一、エグエレストは各期の北西風の終期とモンスーンの始期との間に見られる數週間の比較的好天候の持續期に攻撃されねばならぬ。

二、西北稜は登路としては全然問題外である。

三、第一ステツプ、第二ステツプを越える山稜ではなく山腹を獨り登路が最良である。

四、シプトンが経験した雪質から見て一九三六年の攻撃は五月十五日と六月七日の間に行はるべきである。

五、一九三六年度攻撃隊の中心はこの偵察行に於て試験ずみの人達の肩におかるべきである。

これらの経験、結論を見て興味深く感ずることは、その全部といつてよい程が何等新しい發見でもなければ今迄の知識をくつがへすものでもないといふ事である。第一、モンスーン期間中又はそれ以後の攻撃の可能性或は妥當性はやかましく議論され、パウアー隊の様な大仕事にさへ實行された意見なのであるが、エグエレストに於ける四回の攻撃の傳統はこゝに完全にその合理性を見出された。西北稜に對するマローリーの正確な判断は充分に立證された。第三にノートンが僅かの偵察で發見した登路は其後の幾多の綿密な調査によつてもくつがへされるものではなかつた。これは我々がエグエレストにもはや歴史を有する様になつたことを意味してゐるにすぎない。しかも先蹤者達の血みどろな努力によつて勝ち得られたこの歴史こそがつぎの後繼者達に最も大きい教訓と

示唆を與へてゐる、これがこの結論を見た時の僕の感じた第一のものであつた。一九三三年のエグエレストの物語りは歴史背景の記述なくしては不完全である」とのラットレッツの言葉は當然の様ではあるが今日の我々に考へるべき多くのものを含蓄してゐる。

「エグエレストの頂はこの次の攻撃では得られないかも知れない。或は今後の多くの攻撃も不成功に終るかも知れない。だが見透しは明らかなのである。エグエレストは登られ得るのだ」これはラットレッツの一九三三年の結論であるが、同時にエグエレストの歴史がもたらした結論でもある。シプトン一行の偵察はこれからの戰術を更に明かにして頂と我々との距離を一步短くした。エグエレストの歴史の千秋樂は彼の手によつて一 近くなつたのである。

最後に、だがその意味の重要さでは決して最後ではないことは、この偵察隊の仕事が單なる登山としても素晴らしいものだつたことである。七人の一行が僅か一夏の間に二萬呎以上の異つた頂に立つこと實に二六八〇〇の高さに達すること三十七回、五〇〇以上に露營すること十三回に及び、レオバルギヤールでは五八〇〇に達し、(一八一八)、一八二八には六二二〇の無名峯に登頂せりと傳へらる。一八二〇、トレイル、ガルワールの峠五四〇〇を越ゆ。

ヒマラヤ主要登攀年譜(未定稿)

どんな登攀がヒマラヤに對して行はれ、現在どんな傾向に向つてゐるか、そんなことは今日の山岳界では既に一つの常識となつて居るのであつて、少しでもヒマラヤに關心を有する者には知れ亘つた必要ない事柄であらう。が日本からもヒマラヤ遠征隊が繰出されやうとして居り英國は再びエグエレストに突撃しフランスも亦カラコラムに入らうとして居る今日の機會に今迄集めた資料によつて、ヒマラヤの主要登山年譜を作成して見た次第である。年代は一八〇〇年以前に行はれたゲオス以降の布教旅行時代は登山と關係ないのでこゝに省き、それで一八〇一年以後現在まで行はれた測量、研究旅行、探險等々のうち、登山に關係あると思はれる主要なものをも集録した、従つて小さな登攀、山に關係ない旅行は省かれた。

ヒマラヤを中心とした關係上、バミール、テイエンシンの事項は含まない。地名又は人名の呼び方はかなり難しいが、こゝには自個流の讀み方をして置いた。

表中の數字は年代、又は山の高さを示すもので高きは大略の米を示して置いた。人名はそのバアティの主要人物で、従つてその人が必ずしも登攀したわけではない。

項目の選擇、年代、等について種々疑問の點もあるが、しばらくそのまゝにして、會員諸兄の御教示を受たいと願つてゐる。何かの御參考になれば幸である。(黒田孝雄)

一八一七—二一、ジェラード兄弟、ヒマラヤ測量從事中五二〇〇—五八〇〇の高さに達すること三十七回、五〇〇以上に露營すること十三回に及び、レオバルギヤールでは五八〇〇に達し、(一八一八)、一八二八には六二二〇の無名峯に登頂せりと傳へらる。
一八二〇、トレイル、ガルワールの峠五四〇〇を越ゆ。

一八四八—五〇、フリーカーはネパール、シキム旅行中、バムツオにて五五七〇に達し、カンチエンジュウ、パウハンリを窺ふ。
一八五四—五八、シュラーギントワイト兄弟のカラコルムヒマラヤ、クエンルンに於ける研究旅行。一八五五、東イビンガミン登攀にて六七一二の高度に達し、當時の登高記録を残す、一八五六、ムスタフ

峠に登る。アドルフは一八五七、カシユガルにて惨殺される

一八五八 モントゴメリ、K2を發見す

一八六一 ゴドウキンオースティン等のカラコルム探検—K2地方を旅行す

一八九五 マメリー等のナンガバルバツト登攀。マメリー、六二五二に達し、後行方不明となる

一八六四—五 ジョンソン、クエンリンの測量中、E六一(七三一〇)に登頂せりと傳へらる

一八九六 ネーグ等サセール群の南の峰に登る

一八六八 ヘイワードのカラコルム・クエンリン旅行

一八九八 ブルーズ等のラジエ・ボジエ探検

一八七四 ストリツカ、サセール峠に死す

一八九九 ウアークマン夫妻のラダク探検

一八七九 サラト・チャンドラ・ダス、カンチエンを中心に多くの峠を越へた

一八九九 同上、コーセルガング、『ジークフリートホルン』、『Bウアークマン』の登攀

一八八二 リン・シン、カンチエンの一峠(六九〇〇—七〇〇〇)を越ゆ

一八九九 ネーグのハラム・ク登攀

一八八三 グラハム、ドナギリにて六九二〇に達し、カプルーを窺ひ、A21とジユボヌに登る

一八九九 フレッシュフィード等のカンチエン一周—ゲイチャラ、カシラ、デジョンソン等をこゆ

一八八三 ケネデいのナンダデワイの偵察

一九〇二 ギヤルモ、ゴドウキン、オースチン等のカラコルム遠征—ギヤルモ等、K2を六七〇〇迄に達す

一八八七 ヤングハスバント、北よりムスタフ峠を越ゆ

一九〇三 ウアークマン夫妻のカラコルム探検—ピラミッドピークを七五二に達し、B、ウアークマンはランマ、チヨゴに登る

一八九二 コンウェイ等のカラコルム探検

一九〇五 ジヤコ・ギヤルモ等のカンチエン試登六三〇〇迄に達す—バシユ雪崩にて死す

一八九二 デイネルのガルワール探検

一九〇五 ロングスタフ等ナンダデワイを五八二三まで、グルラマンダータを七三〇〇まで登攀し、トリズールを偵察す

一八九三 ブルース等のイシユベルゾル登攀(五五〇〇)

一九〇六 ウアークマン夫妻、マン

タンにてビナクルピークに登頂す

一八九二 ケラス、カンチエンデヤウに登る

一九〇七 ロングスタフ等の遠征—ロングスタフ等トリズールに登頂しカメツトを窺ふ。ブルース、マム、ハーガン、ハラム・ク等の各群峰に登る

一九一〇 ミード、カメツトを試み七〇〇〇に達す

一九〇七 ルベンソン等カプルーを七二六五に達す、十二日間六〇〇〇以上に滞在す

一九一三 ミード、カメツトにて七一六三(ミーズコル)に達す

一九〇七 ケラス、カンチエンを窺ひネパールギヤツプに登る

一九一三 スリリングスビー、カメツトにて七一二〇に達す

一九〇八 ウアークマン夫妻カラコルム探検

一九一三 ビアツエンザ等マクンクンを探検、クンに登る

一九〇九 アブルヂ公のカラコルム遠征—ブライドピークの七五〇〇に達す

一九一四 ミンチントン、ラホールにて多くの登攀をなす

一九〇九 ケラス、ランボピークに登る。パウハンリ、ネパールギヤツプを試みたり

一九二〇 ケラス、カメツトにて七二〇〇に達す、尙シキムにて、ナルシン、ラマアンデンに登れるものの如し

一九一〇 ロングスタフ等のカラコルム探検—シアチエン氷河の發見

一九二〇 レバーン等、カンチエンを試み六九〇〇に達す

一九一〇 ミード、カメツトを窺ふ

一九二一 ケラス、カプルーにて六四〇〇に達す

一九一〇 ウアークマン夫妻のカラコルム探検—K2を六一〇〇〇まで達す

一九二一 エヴェレスト第一回登攀—ノースコル(七〇一〇)に達す。ケラス死す

一九一〇 ケラス、ガルワールにてカメツトを偵察し、シキムに於てカンチエンの多くの峠をこえ、パウハンリ、チオミオモに登る

一九二二 エヴェレスト第二回登攀—マロリー等八二二五に、フインチ等八三二二に達す

一九一一 スリリングスビー、カメツトにて六七〇〇に達す

一九二二 フイツサアのカラコルム探検

一九一二 ウアークマン夫妻のカラ

一九二四 エヴェレスト第三回登攀

—ノートン等八五三四に達し、マロリー、アヴィン登攀中行方不明となる

一九二四—五 ワードの西藏及ブータンの旅行ナムチャバルワの發見

一九二五 トムバジ、シキムのドームを六一〇〇に達す

一九二五 フイツサア、フンツアの探検

一九二五 ラトリツチ等ガルワールのミラム及ティンフウ氷河の探検

一九二六 ラトリツチ等のカイラス一周

一九二六 メイゾンのカラコルム(シヤクスガム)探検

一九二七 ロングスタフ、ラトレツヂ、ガルワールのリントイサドルに登る

一九二七 モンタニエ、カラコルムのグゼラグ等の探検

一九二九 スボレット公のカラコルム探検—チエリコール五四五〇登頂

一九二九 パウエル等のカンチエン登攀七四〇〇に達す

一九二九—三〇 フイツサアのカラコルム探検

一九二九 ファーマー、カンチエンを試登行方不明となる

一九三〇 デイレンフルト等のカンチエン登攀—六四〇〇に達す、ジョンソンピーク七四五九其他に登る。

一九三〇 ゴーレイ等ロナークピーク六四八〇に登る

一九三一 パウエル等のカンチエン

登山者の倫理と山の性格

浦松 佐美太郎

- 登攀七〇〇に達す
 一九三一 スマイス等、カメツト七
 七五五に登頂
 一九三二 メルクル等のナンガバル
 パット登攀、六九〇〇に達す、テ
 キオットビー七〇六〇、西チヨ
 ングラビーク六四〇〇に登る。
 一九三二 ラツトレツヂ等 ナンダ
 デグイの偵察
 一九三三 ラツトレツヂ等のエグエ
 レスト第四回登攀—スマイス、八
 五三四米(?)に達す
 一九三三 オリバー等のトリゾール
 登頂
 一九三三 モーア等のミニヤゴンカ
 登頂
 一九三三 パリス等のガンゴトリ群
 峰の登攀
 一九三四 メルクル等のナンガバル
 パット登攀七九〇〇に達す—メル
 クル以下八名の遭難
 一九三四 シブトン、ティルマンの
 ナンダデグイ流域探検
 一九三五 ワレル、ハントのカラコ
 ルムK三六の試登
 一九三五 シブトン等、エグエレス
 トの偵察—六、六〇〇(二萬呎)
 以上の山を二六座も登攀。

第七十三回小集會通知

日時 来る六月四日(木 午後六時
 場所 赤坂溜池・三會堂
 講演 内蒙古の風物(幻燈使用)
 江上 波夫氏

長谷川如是閑氏が「山」の第三卷
 第一號に寄せられた「山の性格とそ
 の倫理」と云ふ一篇は、近頃山の雜
 誌に現れた最も有益な論説の一つで
 あつた。

如是閑氏は、同論文の終に「恐ら
 く少しばかり——又は大いに——言
 ひ過ぎたであらう」と云つてゐられ
 るが、私には、言ひ過ぎどころか、
 未だ言ひ足りないと感じられた位で
 ある。それ程に、我國の山は、登山
 が盛んになるとともに悪用せられて
 ゐるのである。如是閑氏は、「観月」
 の例を引いて、山を観る者の環境の
 大切なことを説かれてゐる。それ
 で、箱根の芦ノ湖、日光の中禪寺湖
 の景觀が如何に破壊せられたかを述
 べ、「もし中禪寺湖や芦ノ湖が、今も
 人跡至らぬために自然の景觀を保存
 した湖水だつたら、山岳家達は、ど
 んなにそれを、口に筆にすること
 であらう。その自然を、見る形もな
 く、人間に損はれた故に、彼等はず
 はやそれを棄子のやうに顧みないの
 である」と論じられてゐる。
 併し、私は、景觀が破壊せられた
 から、棄子のやうに顧みなくなつた
 のではないと思ふ。そのいゝ例は、
 日本アルプスの高い山々に幾らも求
 められる。之等の山々は、遠くから

眺めた景觀こそ、如何にも月を肉眼
 で眺める如く、美しい姿である。併

し、一度足を山に踏み入れた途端に
 感ずることは、遠く眺めた姿と全く
 異なることである。恰も月の天文學的
 寫眞を、見せられた様なものであ
 る。遠くから眺める山としての山の
 姿は、その姿を變へるまでに壊され
 てはゐないが、登山の對象としての
 山は、その大切な幾つかの點を、す
 っかり破壊されてしまつてゐるので
 ある。山小屋、山の露營地のあるあ
 たりの慘憺たることは、甚しいもの
 であるが、それよりもつと酷いのは、
 登山路や縦走路である。登山の
 對象としての山は、こんなまでに破
 壊されてゐるのである。それでも登
 山者は、此等の山を見棄てもせず、
 口に筆にしてゐるのである。
 かう考へて來ると、芦ノ湖や中禪
 寺湖を棄子のやうに顧みないのは、
 環境の破壊だけのためではないやう
 である。私は、此の點で稍々違つた
 考へを持つてゐる。本文の冒頭で、
 如是閑氏の一文が、言ひ過ぎどころ
 か、寧ろ言ひ足りないといふところ
 のことである。それに就て、詳し
 く述べて見たいと思ふ。
 如是閑氏は、我國の昔の登山を、
 宗教との結び付に解し、今日の登山

を、科學と文學との結び付に解釋さ
 れてゐる。昔の登山が、宗教と結び
 付いてゐたことは疑もないが、今日
 の登山が、科學と文學とによつて精
 練された一種の文化的行動にまで發
 展したと云ふ如是閑氏の説には、遽
 に賛成することが出来ない。

登山の記録だけを通して今日の登
 山を見れば、如何にも科學と文學
 とによつて精練された一種の文化的
 行動の様に見えるかも知れない。併
 し、登山の記録は、飽く迄記録であ
 つて、登山そのものではないのであ
 る。勿論、此の記録を通して、今日
 の登山が如何なるものであるか、そ
 の片鱗を窺ふことも出来るが、併し
 實際に於ては、それが困難な場合の
 方が多いのである。それは、記録に
 於て山を扱ふ場合、山は、純粹に登
 山の對象たる山として扱はれない場
 合が多いからである。
 一つの登山を終へた登山者が、そ
 の記録を作する場合、彼の前に現れ
 て來る山は、既に登山の對象として
 の山でない場合が多いのである。彼
 は、山を登る時は、登山者として行
 動してゐながら、その登山を記録す
 る場合には、多かれ少かれ登山者た
 る立場を放棄してゐる場合が多いの
 である。彼は、登山者以外の幾多の
 觀點から山を眺め、之を彼の登山記
 録の中に織り込んでゐるのである。
 今日登山紀行を讀む時、多くの場
 合に於て、登山者たる筆者の姿が、
 殆ど表現されてゐないことに氣付く

であらう。

今日登山紀行の多くの筆者は、
 登山者としての彼を、極く小さな部
 分に押し籠め、或は全然没却して登
 山者ならざる彼の感傷により情緒に
 より、彼の登山を、或は山を、筆に
 してゐるのである。従つて、之等の記
 録を通して今日の登山を見れば、確
 かに如是閑氏の指摘する通り、今
 日の登山は科學と文學とによつて精
 練された文化的行動とも見えるであ
 らう。そして又、科學と文學とによ
 つて精練された文化的行動である限
 り、如是閑氏が言はれる様に、今日
 の登山の指導精神と、現實の大衆の
 登山の動向との間に、大きな間隙が
 あると云ふことも、當然の結論とな
 り得るであらう。
 併し、既に述べて來た如く、此の
 如是閑氏の議論は、登山の記録に基
 いて立てられたものであつて、此の
 記録の作者が現實に行つてゐる登山
 そのものを基礎としての議論ではな
 いのである。私は、此の觀點から、
 今日登山を考へて見よう。そして
 如是閑氏の結論とどう違ふか、その
 點を明かにして見よう。
 如是閑氏は、人々が山に對して衝
 動を感ずることを、「山の自然が一つ
 の全性格として、人間の精神と肉體
 とに與へる力を、その力そのものと
 して感じるからである」と説かれて
 ゐる。如何にもさうである。併し、
 之は如是閑氏も言はれてゐる様に、
 「人間の自然愛の最も本質的なもの

なので「あつて、人間對自然の一般關係である。之だけでは、山へ登ると云ふ行動は起つて来ないのである。

登山の直接の動機として、如是閑氏は、昔の登山は宗教であるとし、今日の登山は科學と文學であるとしてゐる。即ち今日の登山は山に智識や藝術を求めてゐるものと解されてゐるのである。如是閑氏は「現在の山の關心が、科學と文學との洗禮をうけた」とされてゐるのである。之は、先にも繰返し述べた様に、今日の登山を、如是閑氏が、その登山記録の或る一面に限つて觀察された結果として生じた誤解だと思ふ。記録に現れた登山こそ、科學と文學の洗禮を受けてはゐるが、現實の登山はさうではない。今日の登山は、スポーツの洗禮を受けたものなのである。

私は、此の觀點から、如是閑氏が今日の登山者並に一般人の山に對する態度に加へられた倫理的批判を、一應調べて見度い。

如是閑氏も、登山が動的なるものであることは否定されまい。併し、如是閑氏が解さるゝ今日の登山は、多分に、非常に多分に靜的な要素を持つたものである。之は、登山の關心を科學と文學に求め、登山の意義を山の景觀にありとされた爲めである。私は、山の景觀が、登山にとつて全然無意義なものだとはしない。併し、それは、決して登山の全部ではない。麓から眺めた山の姿ではな

く、激しい努力の後に達し得た山頂からの景觀は、今日でも登山の重要な一部分を占めてゐる。併し、それは一部分なのである。今日の登山にとつて最も重要な部分は、山を登ることの楽しみなのである。之が、スポーツの洗禮を受けた今日の登山の著しい特色なのである。従つて山を見る目にも、今日の登山者と、一般人との間には、可成の相違が生じてゐるのである。例へば如是閑氏が引用された中禪寺湖や芦ノ湖に就て云へば、若し中禪寺湖や芦ノ湖が自然の景觀を保存してゐたとしても、今日の登山者は、如是閑氏が考へられる様に、一生懸命に口にした筆にしたりすることはなからう。何故ならば、中禪寺湖や芦ノ湖は、登山の對象としては、まことにつまらないものだからである。勿論登山者と雖も、中禪寺湖や芦ノ湖が美しければ美しいと云ふに違ひなからう。併し之は、登山者としての彼の言ではない、登山者ならざる彼の言なのである。今日の登山は、科學や文學に結び付いたものではなく、スポーツに結び付いたものである。若し今日、登山者なりと自ら稱しつゝ、中禪寺湖や芦ノ湖の藝術的表現に専心し、山の科學の探求を事としてゐる者があれば、之は登山者の僭稱である。彼等の登山の記録と稱するものは、登山者の作物として見るべきでなく、文學者或は科學者の所産として批判されるべきであると思ふ。此の點

の相違を、先づ明かにして置き度いと思ふ。

如是閑氏は、昔の先覺者が、登山を宗教的に指導した賢しさを稱されてゐるが、同じ様に賢愚の標準を適用することを許されるならば、今日の先覺者が、登山にスポーツの指導精神を與へたことを、賢しとしなければならぬまい。如是閑氏は今日の大家が「山をたゞ自己の劣情の玩弄物とすることを知つて、山の性格の力を感じてゐることを知らない」と慨嘆されてゐるが、之は今日の登山の指導精神が誤つてゐるが爲めではないと思ふ。若し、スポーツとは何であるかと云ふことが正しく理解されるならば、今日の登山の指導精神を以て十分に、山を自己の劣情の玩弄物たらしめることを防ぐことが出来るのである。であるから、問題は、今日の登山の指導精神が誤つてゐると云ふ所にあるのではなく、指導精神の理解が缺けてゐる所にあるのである。

スポーツと云ふことの理解されてゐないのは、登山界だけではない。ゴルフでも、陸上競技でも、何でもいゝ、我國に於てスポーツと名の付くものゝ何れを取り出して見ても、眞にその精神の理解されてゐるものがないことに氣付くであらう。全般としてスポーツが理解されてゐない此處に禍因が潜んでゐるのである。若しスポーツと云ふことが、はつきり理解されてゐるならば、登山者

は、如何に山に對すべきか、如何に山に登るべきか、如何に山を護るべきか、如何に他の登山者に對して禮儀を守るべきか、之等のことは自ら定まつて来る筈である。スポーツなればこそ自由の天地が與へられる。それだけに又、此の自由の天地を作る爲めの義務が課せられる。山の點がはつきり理解されさへすれば、今日の登山は、その指導精神を以て、十分に立派な効果を擧げ得る筈なのである。例へば、此の觀點から山を見れば、山の景觀が損はるゝ様な施設の行はるゝことが問題となる以前に山の岩を削つて登山道を通じ、針金を結んで頂上へ道を開き、山の背に鐵の柵干を作ることこそ、登山者が猛烈に反對すべき道理も明かとなる。然るに實際に於ては、スポーツとしての登山の意義を全く失つてしまふ様な、山の破壊が行はれても、殆ど黙過されて來てゐるのである。もつと解り易い風景の破壊となつて始めて問題とされるのが常である。

風景の破壊は一般の問題である。併し山の破壊は登山者の問題である。我國の登山界は、自己の社會に特殊なる此の山の破壊に就ては、殆ど無關心である。此處にも、登山が何であるかを少しも理解してゐないことが表明されてゐるのである。例へば富士山にケーブルカーを通じると云ふに至つて問題が起つた。併し、その以前に、富士山にコンクリート道路が出来ても、問題とはならなかつた。富士山にケーブルカーを敷設しようとする導因は、既にこんな所にも平然と放り出されてゐるのである。立山の稱名湖の上にコンクリートの橋が出来た。之も登山界は黙過したのである。立山に、此の次に來るべきものは何であるか。登山界は、自己の城砦の一之堀を埋めさせたのである。二之堀、三之堀は瞬く間に埋められることであらう。さうなれば、最後の内堀を守ること難しいのである。金城鐵壁を誇らうとするには、敵を外堀で妨がなければならぬのである。之を越えて一兵をも入れさせない。之で始めて城を全うすることが出来るのである。

自己の肉體力、精神力の餘力を傾けて山に登る。其處にスポーツとしての登山の意義があるとすれば、その登るべき對象たる山に、或る限界を越えた人爲を加へることは、最も反對しなければならぬ事である。然るに拘らず、之を平然と許してゐるのが、今日の登山界である。従つて、此の混迷の登山界には、外部からつけ入る隙が、幾らも開いてゐるのである。之こそ、山で金を儲けるものにとつて、絶好の機會である。資本主義の社會である以上、山が金を儲けることを絶対に排斥することはない。それが登山の向上に資するものである限りは、許さなければならぬまい。併し、事實は、多くの場合、山で金を儲ける施設は、登山を墮落せしむるものばかりである。

併し、需要と供給の兩者がなければ、經濟は成り立たない。供給に對して、需要がある筈である。山の需要の側に立つものが、今日の登山者の大部分なのである。如日閑氏は、大衆の山への衝動を「全く昔の人々と同じく、山そのものに對する生の衝動からのあこがれ」であると解されてゐる。若し今日の大衆が全部かうであるとしたならば、問題はもつと簡單であらう。今日の大衆が、流行に動かされるものなることを、如是閑氏は看過してゐられる。生命の充足を求めるよりも、極く上すべりの流行を追つて、山へ登る者が多いのである。彼等にとつては、山は流行の道具にしか過ぎないのである。流行である以上、虚榮は直ちに大きな支配力を振ふこととなる。穂高の縦走が一つの高い標準を示す登山となれば、我も我もと登りたがる。虚榮の充足を求めるものは、實力を顧ない。實力のない者にも、難しい山に登らせようとなれば、山を易しくするより方法がない。従つて山が削られ、破壊され、針金が結ばれ、鐵の欄干が立つのである。之を押し詰めてゆけば、コンクリート道路となりコンクリートの橋となり、ケーブルカーとなるのである。自然に恵まれたる峻しき山によつて身心を鍛鍊する所に、山の宗教が生まれ、スポーツが生まれたのである。之が登山の本然の姿なのである。然るに登山が盛となるに連れて、肝心の道場が破

壊せられ、修養の道は失はれつゝあるのである。夏になれば、蓄音器會社は、山のキャンプに提げてゆく蓄音器の廣告をする。山の小屋は、自分の小屋に客を引く爲めに、山を削つて勝手に近道を作つてゐる。之が今日の大衆の登山の姿なのである。此の社會に於ては、登山は全く虚榮の流行と墮してゐる。然も彼等の數は多く、その需要の力は大きいのである。従つて之に應ずる山で金を儲ける供給の側は、彼等の虚榮心に阿ねることに専心してゐるのであるかくして山は荒され、登山はその眞の面目を失ひつゝあるのである。それならば、之を指導すべき立場にある登山家の社會はどうか。その非なることを悟りつゝも、彼等は之を正しく指導すべき力を持つてゐない。又、意力も持つてゐない。山が俗化したと慨嘆し、之から遠ざかることはしても、進んで之を護り、よき方向へ指導しようとする努力をしてゐない。之等指導的立場にある登山家こそは、水源地を守護すべき人達である。水源地を固く守つてゐれば、下流の濁りは、容易く元に戻し得るのである。併し、今彼等は、その大事なる水源地をも、無理解の闖入者に委せてしまつたのである。此の現状を改めるには、二つの方法が考へられる。一つは、日本人一般の精神的向上に俟つのである。之は教養の問題であつて、登山以外の問題である。日本人一般の教養の高

めらるゝことによつて、その一部分にしか過ぎない登山者の社會の水準をも高めようとするものである。之は如是閑氏が、その結論に於て示唆されてゐる所である。併し、日本人一般が、何時になつたら正しく登山を理解し得るだけの高い教養を得るに至るか。之は、相當永い將來のことを考へねばなるまい。それまで待つとすれば、山はどうなるか。考へただけでも空想らしい氣がする。そうすれば、方法は唯一しかないとも云ひ得る。現在登山界に於て、指導的立場にある人達が、その獨善的態度を捨て、もつと積極的に動き出すことである。その守護すべき城砦を、固く守り通すことである。實力を養ふことによつて、始めて山を眞に味はひ得るものなることを、大衆に教へることである。少くとも登山を通じて、スポーツの何ものなるかを大衆に教へ得たりとすれば、之は一つの大きな國民への貢獻である。

併しその爲めには、現在指導的立場にある人達が、自らスポーツの何ものであるか。をはつきり理解することが必要である。そして自らの教養を、更に高める努力を拂ふことが先決問題である。如是閑氏が云ふが如く、「今の登山家にはその基礎的精神が缺けてゐる」のである。今日の登山が、如是閑氏に、「科學と文學とによつて方向づけようとして」ゐると云ふ様な印象を對へた原因も、亦此處に胚胎してゐるのである。私は、登山をスポーツとして考へることを、強調して來た。私が今迄述べて來た所を、よく理解して貰へれば、此のスポーツと云ふ言葉を、非難されることもあるまい。併し、稍ともすれば、誤解を招き易いので一言附け加へて置き度い。その最も誤解を招き易い點は、如是閑氏も問題として提出されてゐる、山の性格の把握に關する點である。先にも述べた様に、今日の登山の特色は、その動的なる點にある。山の性格も、靜的に眺めたる山として理解しようとするのではなく、登山の對象として、動的に之を把握しようとしてゐるのである。從來全く知られなかつた此の性格の多くが、此の登山によつて、新しく知らるゝに至つたのである。山の新しく知られたる山の性格こそが、又、今日の登山の魅力となつてゐるのである。そして山の性格の理解によつて、自然の堂奥に參ぜんとする今日の登山者の努力こそは、昔日の講社連中の比ではないのである。山の一本一石を忽にしない彼等の態度も、昔日の講社連中よりも、遙かに純眞な、そして素直なものである。彼等の間に行はるゝ戒律も、昔日の講社連中のそれよりも、もつと嚴重で、そして遙かに明朗なものである。之等の點を見ずして、今日の登山の方向を非難し、昔日の講社登山を以て、遙かに美しきもの

ゝ如く説く人は、餘りにも偏つてゐると云はねばならない。たゞ此の段階に達することが、講社に加はつて登山するよりも遙かに困難であることは云ふまでもない。云ひ換へれば、登山の水準は、昔日よりも遙かに向上したのである。従つて山の水準に達する爲めに、個人に課せられた修業の負擔も、遙かに重くなつたのである。問題は、水準が其處まで上つてゐながら、之に達する努力を拂ふ者が、現實に於て甚しく少いと云ふことなのである。そこで再び、問題は、個人の教養の問題に歸つて來る。如是閑氏と同じく、私は今一度、登山者の精神力の缺如を此處に指摘し度いと思ふ。

私は、如是閑氏の議論を追ひつゝ同氏の解さるゝ今日の登山並に明日の登山の方向に關し、私自身の思ふ所を述べ、そして、如是閑氏が觸れられざりし今日の登山界の幾つかの問題を論じたのである。私は、如是閑氏の言ひ足りないと思ふ所を、言ひ足したつもりである。併し、之でも未だ言ひ足りないことは多々あることと思ふ。多くの人々によつて慎重に論議され、そして、十分に言葉を補はれんことを希望して止まない。

「會報」合 本

一、一號より五十號までの合本表紙出來。

二、體裁會報綴込用表紙に準ず。

三、代金一圓(製本料、送料共)

◆會員通信◆

雲の北平

今年は珍しく雪が多く只今五六寸積つてゐます。スキーを持つて来てゐたら香山に行く途中のバス道から近い所に香山があつて良い傾斜を持つてゐるだけだ。

もう一年間居るならばと小さい家を借りました。掃除を頼み、食事は近くの中山公園に運動がてら食へに行きます。

二月二十五日

北平 伊藤 愿

春の蔵王山と吾妻山

三月廿六日(吹雪) 遠刈田—峨々温泉

泉

廿七日(晴) 峨々温泉—刈田岳

—熊野岳—最上 湯—上ノ山

廿八日(曇後晴) 上ノ山—板谷

—五色温泉—青木小屋

廿九日(晴) 青木小屋—家形山

—一切經山—硫黄精煉所小屋—

幕ノ湯—鷺見ノ湯—土湯峠—横

向温泉—沼尻群山

額田 敏

春の遠見屋根

四月三日(雨) 神城—遠見屋根小屋

四月四—五日 吹雪滞在

四月六日(晴) 午前六時十分小屋出

發—五龍岳(十二時—十二時半)

小屋(三時半—四時半) 神城松本

額田 敏

春の朝日岳

本年正月悪天の爲空しく下山した東北朝日岳へ去る四月一日夜行にて再度訪れました。二日は快晴にて雪庇の豊富な頭殿山を越へ朝日嶺泉に入り、三、四、五日は連日吹雪又は霰で籠城、六日素晴らしい快晴に勇躍小朝日岳登頂に成功しました、嶺泉より往復に約九時間を要しました。鳥原附近は全く乗鞍の位ヶ原を彷彿させる様なスキー場で壯快な春山の滑赤を充分享受する事が出来ました。不取敢右御報告迄

四月九日

岡田 美雄

◆新刊紹介◆

THE SPIRIT OF THE HILLS

By F. S. Smyth

Hodder & Stoughton, London 1935

(22×14.5, pp. 308)

あれだけ山へ登つてしかもよくこんな本が書けるものだと思ふ。彼の程スマイスは本をこしらへる。彼のカンチエン遠征記にしろカメツト登頂記にしろ實に手早くまとめられて吾々の眼前に現れたものだ。それだけにとかく事務的なほひがするのは當然だ。

一昨年 An Alpine Journey を世

に送つたかと思ふと昨年十月にはもうこの一書を上梓して居るし全く驚き入つた精力である。

この書はスマイスの山に對する態度を半ば自傳的に叙述したものとして取扱つてよいであらう。

少年時代、青年時代、低山、高山、からより高いヒマラヤの山々に及び、曉、夜を語つたかと思ふと、音楽、花について語り、又は山でのユーモア、友情、死を描き、終りに肉體的な側から心理的な側から精神的な立場から山への態度を明かにして居る。

現在の登山家中でもその足跡と經驗の廣いことでは第一人者であるといへるスマイスだけに、どの章にも廣大な經驗が物を云つて居り、たとへばエヴェレストでは……とか「カメツトの最高キャンプでは……」とかいふ言葉が氣輕に出て来るのだからたまらない。

彼がこの著書の中で、何よりも自分の體驗を主張し、體驗こそ第一のものだと力説するのうなづけることだ。たとへば「他人の經驗は煉瓦と煉瓦を接合するモルタルではあつても、決して煉瓦そのものではない」とも云つて居る。

その豊かな經驗から彼は山岳の意義と人間の登高心理を説明しやうとしたのだが、視野の廣さは格別である。ヒマラヤへの各國登山隊進出の折柄、英國人である著者が、山をとりまく國家的意識の對立を憂へて居るのなぞ面白い。

この本の構成を眺めて居ると、ふとあの G. W. Young の On High Hills が思ひ出される。「山と少年」に始まり、「最後のアルプス登攀」に終るこの名著がスマイスのこの著書と同じやうな形式のものとして浮んで来るのだが、それを考へるにつれてスマイスの文章が豊かな經驗にも不拘、まだまだ立派な表現の域には達して居ないことを思はされる。卒直ではあるが味がなく、多様性をもつがドライな——といった讀後感を得るのは自分だけだらうか。(島田生)



會務報告

一九三六年版山日記

1. 主要目次及執筆者
- 曆、七曜表 日記欄 登山經歷欄 自由日記欄 住所欄 方眼紙

以上一四四頁

* 登山の注意 松方三郎、* 冬期登山、同上、* 山岳氣象、服裝及食料、登山用品表及食料目録、登山衛生及應急手當 片山弘、地圖使用上の注意 蘭部部、* 山岳寫眞 額田敏、

本邦山岳高度表 本藤理太郎、峠高度表 同上、世界高山百座 同上、* 登山日程表(臺灣、九州、北海道を新たに加ふ)、山岳概念圖(八葉)、山小屋、山案内、帝室林野局・營林署所在地、全國登山團體一覽、星圖、地名解讀、郵便規定、日本山岳會々則其他

以上記事欄約三〇〇頁

2. 發行 昭和十一年五月下旬

3. 定價 一圓 梓書房發賣

* 印は本年新たに書加へられ乃至は根本的訂正されたもの、其他の項もそれ〴〵訂正され、山小屋、山案内、登山團體等は調査の上最近の狀況を掲ぐ。

山日記會員割引預約募集

會員の便宜を計り左記の通り預約を募ります。多數會員諸氏の御申込あらん事を希望します。

頒配價 金八十錢

送料 金四錢

申込期限 五月末日

申込所 本會事務所(振替東京四八二九番)

1. 送金は申込と同時に
2. 可成振替貯金を利用され度
3. 申込部数に制限なし

四月定例理事會

四月十六日(木) 午後六時半より本會事務所に開催。
茨木、飯塚、松方、田口、三田、

逸見、島田、磯野、角田、櫻井、黒田、出席。

- 一、山岳遭難救助機關本會案の件
- 一、山日記編輯報告
- 一、山岳三十一年一號編輯報告
- 一、會員有志晚餐會の件
- 一、小集會(六月四日)開催の件

昭和十一年度會曆

- 五月十三日(水) 有志晚餐會
五月廿日(土) 山日記發行
六月四日(木) 第七三回小集會
六月廿日(火) 山岳第一號發行
九月三日(木) 第七四回小集會
九月廿日(水) 山岳第二號原稿締切
十月一日(木) 有志晚餐會
十一月五日(木) 第七五回小集會
十一月廿日(月) 山岳第二號發行
十二月十日(木) 年次會員大會

會員章再交付

會員章紛失の届出ありたるにより左の通り新に交付せり。
會員章番號一六三九(舊一四五六)
松山中學校山岳部代表倉橋宗由
従て舊會員章一四五六號は無効となれり。

代表者變更

東京市麹町區丸の内三菱本館内
三菱俱樂部陸上運動部代表
間 四 郎
埼玉縣忍町忍本町二丁目
忍町山岳會代表 栗原 代八

退 會 者

昭和十一年四月
(二五六) 横濱市 三溝貞之助

新 着 圖 書

山岳講座 第四、第五 共立社
地學雜誌 三月號 東京地學協會
登山とスキー 四月號 黎明社
ケルン 同 ケルン編輯室
山小屋 同 明文堂
山 同 梓書房
野 鳥 同 集林書房
寫眞月報 同 小西六本店
中西悟堂著、野鳥と共に 集林書房
The Geographical Journal
Feb./Mar. 1933
Natural History Feb./Mar. 1933
The Prairie Club Bulletin Mar. 1933
Appalachia Mar. 1933
The Mountaineer Mar. 1933
La Montagne Feb. 1933
Die Alpen Mar. 1933
Rivista Mensile Feb. 1933
De Bergids Mar. 1933
Unions Ligure Escursionisti
Gennaio 1933
Butlia i del Centre Excursionista
De Catalunya Gen./Feb. 1933
Alpina Enero 1933

Vestnik Klubu Alpistu Mar. 1933
Planinski Vestniky. 3 L. 1933
S. T. F. Mars 1933

會員寄贈圖書

九州の山の話(九大生物學十日會講演)
以上 竹内 亮氏
木下糾著、米國アルプス踏破記
以上 高野 鷹藏氏

◇編輯室から◇

年中行事の一つ「山日記」の編輯が愈々最後の段階に入つて、編輯委員は毎日校正で血眼です。毎年正確に販路を擴張して行く「山日記」の前途の爲にも、むつて會員からの御註文が殺到するやう希望して已みません。(七頁御参照のこと)
序でに四頁と六頁にある小集會豫告並に會報本廣告を御覽下さい。
小集會の講演者江上氏は蒙古學者としてその道に知られた新進學徒です

會報投稿規定

- ◇原稿は山岳に關する研究、隨筆、紀行、消息の類に限ります。
- ◇原稿締切 毎月五日
- ◇原稿用紙は十六字詰のこと
- ◇用紙御希望の方には會から御送りします。
- ◇原稿は特に御希望なき限り一切返却致しません。
- ◇原稿の取捨は會報編輯係に御委せ下さい。その他編輯上の一の事項は編輯係が全責任を負ひます。

昭和十一年四月廿五日印刷
昭和十一年四月廿九日發行

發行所 松方三郎
編輯兼印刷者 逸見眞雄
東京市小石川區戸崎町一三
印刷所 多木印刷所
東京市芝區琴平町一(不二屋ビル)
發行所 日本山岳會
電話・芝一六四九番
廣告一手取扱 進恒社
電話 四谷六五四番



山とスキーの月刊雜誌
一部二十五錢・年三圓

編輯は一に向上と前進を望む同好者を目標に、常に經驗に富んだ登山家のルツクのやうに精選された内容をもつて張りきつてゐる。餘剩部數を刷らないから書店か發行所(大阪市北區堂島上通一丁目大阪貯蓄ビル・ケルン編輯室・振替大阪一七〇七五番)へ申込んでおかぬと手に入らぬことがあるかも知れない。